

Title	「映像を使う社会学」の可能性と課題：コメントにかえて
Sub Title	Possibilities and challenges of video sociology
Author	鈴木, 弥香子(Suzuki, Mikako)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2021
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.26 (2021. 7) ,p.42- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：映像を使う社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20210703-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「映像を使う社会学」の可能性と課題 ——コメントにかえて——

Possibilities and Challenges of Video Sociology

鈴木 弥香子

1. はじめに

2020 年度三田社会学大会シンポジウム「映像を使う社会学」では、多様かつ充実した 4 つの報告と、2 人の討論者とフロアからのコメントを含めた活発な議論が行われた。当日筆者は、報告に対するコメンテーターを務めさせて頂いた。登壇した 6 人の中でも、理論研究を専門とする筆者は、「映像を使う社会学」からおおよそ最も遠いところに位置する存在であったかと思う。しかし、そうした少し変わった立ち位置からだからこそ、少し異なる視点を提示できるかもしれない。本稿では、シンポジウムにおけるコメントや質疑を踏まえ、「映像を使う社会学」の持つ可能性と課題について論じてみたいと思う。

2. 「映像を使う社会学」とは

現代社会において、視覚イメージが我々の認知において果たす役割は非常に大きい。その役割の大きさに比して、社会学研究において視覚イメージの活用は十分であるとは言えないだろう。こうした問題意識は、1970 年代以降、アメリカやイギリスをはじめ世界的に広く共有され、視覚社会学 (visual sociology) として発展してきた。

レオナルド・ヘニーが言うように、視覚社会学について論じるとなると、まるで社会学には言語社会学 (verbal sociology) と視覚社会学 (visual sociology) が存在するかのようだが、言語社会学がなぜ必要かについて語られることはない。なぜなら、社会学者はグーテンベルグ症候群 (Gutenberg Syndrome) にかかっており、書き言葉を情報伝達における自明なメディアとして考えているためである (Henny 1986: 1)。グーテンベルグ症候群、「言葉の学」(discipline of words) としての社会学を超え、視覚的メディアを研究や教育において活用しようという動きは、社会学内のみならず、領域横断的な取り組みとして発展してきた (Banks 2001; Hughes ed. 2012; Margolis and Pauwel 2011; Pink 2001; Rose 2001 など)¹⁾。

しかし、書き言葉のみを自明なメディアとして考えるのは、そもそも社会学において常ではなかった²⁾。ヘニー(1986)が明らかにしているように、19 世紀に遡り、*American Journal of Sociology* (AJS) の第 1 号では社会学者やソーシャル・フォトグラファーによる写真が掲載されていた。創刊から最初の 15 年は、多くの号において写真が掲載されており、それらは主に社会的な変革を訴える論文に関連するものであった³⁾。1914 年に AJS の編集長がアルビオン・スモールに変わったことにより、写真掲載に関する方針に明らかな変更が加えられたとヘニーは明らかにしている。スモールは、社会学が生物学や物理に匹敵するようなハードサイエンスになるべきと考え、その結果、1915 年以降はドキュメンタリー写真はジャーナルから消え、統計を中心とした論文が中心になったのである (Henny 1986)。その後、アメリカ社会学において写真は長き渡り脇に追いやられることになる。カメラが再発見されることになるのは、1960 年代であり、その時に 'visual sociology' という言葉が広く使われるようになったという (Henny 1986)。その後、1970 年代半ばになり視覚イメージへの関心が徐々に回復

し、ダグラス・ハーパーやハワード・ベッカーといった研究者たちが中心となって、視覚社会学を社会学の一分野として発展させていったのである (Becker 1974; Harper 2012)。

この visual sociology を日本では映像社会学と訳すことが少なくないようだ⁴⁾。石田佐恵子が明らかにしているように、visual を映像と訳す慣例は、社会学でなく人類学にも見られる (石田 2009: 9)。本稿では、研究の文脈よりも言葉の厳密さを優先し、visual sociology は視覚社会学と訳し、映像社会学に対応するものとしては video sociology を想定することとする。視覚社会学は、写真、映像等の視覚メディアを研究に活用するものと定義し、その一類型として映像社会学を考えることにする。

3. 日本における映像社会学

日本における映像社会学を概観すると、大きく4つに分けて考えることができるだろう。

まず、映画といった映像を分析対象とし、そこに見られる表象を読み解くことを目指す社会学である (戦争社会学研究会 2018; 好井 2007, 2009)。例えば、戦争社会学研究会編(2018)は、『野火』や『この世界の片隅から』といった戦争を題材とする映画において戦争がどう描かれてきたのかについて分析している。さらに好井(2009)は、映画やドキュメンタリーを素材とし、そこにおいて展開される人々の語りや営みを解読することを通して、「日常の政治」——日々のコミュニケーションにおける差別、排除やそれに対する抵抗など——を読み解く重要性について論じている。

第二に挙げられるのは、研究対象に関する撮影を行い、その映像をデータや資料として活用するものである。この分類には、社会調査として映像を活用する研究が当てはまり、これについては日本都市社会学会年報で特集が組まれたこともある (後藤 2011 など)⁵⁾。本シンポジウムの登壇者で言えば、8月6日の広島平和記念公園でビジュアル・フィールドワークを実践した松尾、エスノメソドロジー研究で映像を活用する吉川がこの分類にあてはまるだろう。

そして、三つ目は、大学における社会学教育で映像を活用する立場である。この例として挙げられるのが、山中(1993)である。山中は、多くの社会学の概念や理論は、映像的な表現によって説明する方がはるかに理解しやすいとし、様々な映画のシーンを参照しながら、様々な概念を説明している⁶⁾。

四つ目は、研究成果として、もしくは社会学的実践や作品として映像を作成するという立場である。これに当てはまるのが、本シンポジウム登壇者である土屋やプルサコワである。日本においてはこの分類に関してはまだ事例が少ないが、英語圏、特に人類学においては、ハーバード大学の感覚民族誌研究所(The Sensory Ethnography Lab)など、研究成果として映像を作成するという事例が近年増えている。これまでも映像と社会学を主題に置くシンポジウムは日本でも多く開かれてきたが、研究成果／社会学的実践としての映像を射程に入れたものとして本シンポジウムは画期的だったと言える。

4. 研究成果としての映像をめぐる問い

ここからは、主に第四の分類、特に研究成果としての映像について考えていきたい。シンポジウムでも議論となったのが、映像作品は映像のみで研究成果として成り立つのか、言語による解説を必要としないのかということだった。この議論の背景にあったのは、シンポジウムにおけるプルサコワ・ありなによる映像作品の上映である。彼女は作成した作品、『皮膚』を上映し、その作品に対する解説をあえてそこで行わなかった。この作品上映は、学術的な

シンポジウムは映像作品をどう扱うべきなのか／扱いうるのかというラディカルな問いを投げかけたのだ。

研究成果としての映像を考える場合、その映像は言語による解説や分析を全く必要としないのだろうか。研究成果というのであれば、やはりその映像に対する解釈や分析の提示が必要なのではないか。分析のない映像は、データや資料にはなりえても研究成果にはなりえないのではないか。分析のない映像は、分析をされるのをただ待っているのだろうか。それは一体誰によって分析されるのだろうか。このような問いがある一方で、テキストでは十分に表現できないものであるからこそ映像というメディアを活用しているのであって、それについて言語的に説明しようとするれば、何か重要なものが抜け落ちてしまう可能性も考えられる。例えば、人類学における映像メディア活用には、文字では十分に表現できない、複合的／多元的な感覚経験の記録という課題があった (宮坂 2020)。

しかし、もしある映像作品を社会学の学術的な成果として考えるのであれば、分析についてはともかく、少なくともそれがどのような理論的な系譜、社会学的な文脈の中に位置付けられるのかについて説明する必要があるのではないか。その作品が何を問題としているのか、何を批判しようとしているのか、どのような新しさや意義を持つのか。映像は手段であって、映像を活用すること、それ自体に目的や価値があるのではないだろう。その映像が何を問題化しようとしているのか、どういった視点を提示しようとしているのかなどについてやはり説明する必要があるのではないか感じられるのである。そうした説明がないと生じる問題として考えられるのが、アウトプットとしての映像が先行研究として参照されない、その成果が継承されていかないということである。どのような問題意識を持った、どのような研究の系譜の中に位置付けられた取り組みなのか分からなければ、映像作品は見過ごされてしまう危険すらあるかもしれない。

5. 査読対象としての映像—*Journal of Video Ethnography*

研究成果としての映像は、視覚社会学やその関連分野が日本よりも発展している英語圏では実際にどう扱われているのだろうか。英語圏には映像作品を査読の対象とするジャーナルがいくつか存在する⁷⁾。例えば、*Journal of Video Ethnography* (以下、JVE) である⁸⁾。このジャーナルでは映像作品が査読の対象となり、2021年3月現在、全35作品がオンライン上で公開されている。

JVE は、デポール大学の社会学部を拠点とするオンライン・ジャーナルで、2014年に第1号が発行されている⁹⁾。このジャーナルは、社会、システム、文化を調査するための方法として、そして調査による発見を発表するメディアとしての映像の活用を促進することを目的として掲げている。映像を付随的なもの、もしくは単に説明に役立つ、補足的なものとする既存の研究とは異なり、映像だからこそうまく取り入れられるリサーチクエストや研究の主題への取り組みに光をあてようとしている。さらに JVE は、査読システムを科学的言説における要とし、査読がなければ新しい分野において基準や指針は生まれえないという考えから、エスノグラフィックな映像を評価するための厳密なガイドラインを確立することを目指している。提出された映像は2名か3名の匿名の査読者による審査を受ける。査読者の専門は様々だが、社会科学的なエスノグラフィーに取り組んでいるという共通項がある。そして、

エスノグラフィックな映像を作成している人が少なくとも一人は査読パネルに含まれることになっている。

JVE がその査読の対象とするのは、映像を研究アウトプットの形式、中心的な方法論とするエスノグラフィックな研究で、具体的な文脈から切り離された「クリップ (clips)」やその理解に際してテキストを必要とする映像は対象外だ。ただ JVE は映像とともにいくつかの文章の提出を要請している。1) 内容要約 (250 語以下)、2) 映像作成において影響を与えた、理論的、概念的な枠組みや視点についての説明 (250 語以下)、3) 映像作成において影響を与えた方法論についての説明 (250 語以下)、4) 映像を通して伝えたい、主なエスノグラフィックな、もしくは社会科学的な発見 (findings) / 知見 (insights) についての説明 (250 語以下)、5) 数々の実証的な研究においてあなたの映像がどこに位置付けられるのかを示す、中心的な学術的研究 (論文、書籍、映像など) の一覧 (1000 語以下)、6) 映像を最もよく言い表すキーワード一覧 (10 語以下)、以上の 6 項目である。

JVE で公開された映像はこれまで論文にどれくらい引用されてきたのだろうか。Web of Science の引用文献検索機能で調べたところ、被引用数は 4 件であった (2021 年 3 月 31 日現在)。類似サービス Scopus でも同様の検索をしたところ、5 件 (うち 4 件は Web of Science の検索結果と重複) がヒットし、合計 5 件のうち 1 件は誤った結果であった (Krase 2017)¹⁰⁾。残る 4 件のうち、Literat et al. (2018)、Redmon (2014)、Sismondo (2016) は JVE というジャーナル自体に言及し、その取り組みについて記述しているものの、特定の映像作品についての言及は見られなかった。Canals (2018) は唯一 JVE 掲載の映像についての言及があったが、それは本人による作品に関するものであった。

映像を研究成果として提示するのであれば、やはりそれが先行研究として引用 / 参照され、その先の研究につながっていくのが理想的であろう。しかし現時点では——まだ公開から時間が十分に経過してないことも作用していると思うが——、英語圏においても、ジャーナルへの言及を通して映像の活用それ自体の価値については語られても、その映像で何が描かれていたのかについてはまだほとんど議論されていないことがわかった。JVE による新たなジャーナルのあり方の提示は、非常に先進的であり注目に値するが、まだ歴史は浅くその影響は限定的なものにとどまっている。英語圏においてもこうした取り組みは始まったばかりであり、今後もその展開に注目する必要があるだろう。

6. おわりに—「開かれた」映像のために

シンポジウムであがった論点として最後にもう一つ言及したいのが、映像とそれを見る人々間の関係性、コミュニケーションの重要性についてである。映像の持つ重要な特徴として、二つの意味の開放性 (openness) が考えられる。第一に、鑑賞者に対して解釈が開かれていること、第二に専門知識を持つ研究者だけでなく、より多くの人に開かれていることの二つである。テキストには正しい読み方 (そして誤読) が存在するが、映像は一つの解釈には限定されず、多様な解釈が可能である。支配的なストーリーに回収されず、複雑性・多元性が表現できるのは映像の大きな利点であるといえよう。

しかし、この集約不可能性、多元性は同時にある種の「わかりにくさ」を生むとも言えるのではないか。たしかに映像は視覚があれば誰でも見ることができ、読むことの持つ特権性

を切り崩すことを可能とするが、見たものを理解するには、やはりある種のリテラシーを必要とするのではないか。そうだとすれば、本当に「開かれている」と言えるのだろうか。

さらに、映像を「開かれたもの」とするのであれば、映像を介した対話やコミュニケーションにより多様な人々が参加できるようにする必要がある。長谷正人は、映像とは製作者によって主観的に解釈された現実の間接的反映ではなく、社会に開かれた表現であり、映像をめぐるコミュニケーションの中に存在すると論じている(長谷 2003)。もし、そうしたコミュニケーションの中にこそ映像が存在しうるのであれば、そうしたコミュニケーション／対話の空間を拓くための取り組みが求められるだろう。

社会学研究において映像をどう活用するかという取り組みはまだ歴史は浅いものの、大きな可能性を持った分野であると言える。社会をよりよく理解する上で、映像の活用を重要な課題として今後も考えていく必要がある。

【註】

- 1) ‘Discipline of Words’は人類学者、マーガレット・ミードの論文、Mead (1975) によるものだとされているが、言語偏重の傾向は人類学ではなく社会学にも当てはまると考えられている (Twine 2016)。
- 2) 社会学において視覚的なメディアの活用を提唱した先駆者として知られているダニエル・ハーバーは、社会学研究者はその研究において現実の視覚的な部分を記録すべきだというシンプルな提案が、社会学においては未だに画期的なものに見えるようだと言っていた (Harper 1998: 20)。
- 3) 写真を活用した研究としては、古くはグレゴリー・ベイトソンとマーガレット・ミードのバリ島における共同研究に基づく Bateson and Mead (1942)、アーヴィング・ゴフマンによる広告イメージにおけるジェンダー表象の分析 (Goffman 1979) などがよく知られている。
- 4) 例えば、日本における映像社会学の第一人者の一人である山中速人も、visual sociology を映像社会学と訳していることが確認できる。「アメリカで編集され、世界でもっとも充実した社会学文献目録の一つである『ソシオロジカル・アブストラクト』には、「ビジュアル・ソシオロジー (映像社会学)」という独立した項目があり、毎年、多数の研究論文がなんらかのかたちで映像を社会学との関連においてとりあつかうと試みている。」(山中 1993: 4)
- 5) 2010 年に日本大学文理学部で開かれた、第 28 回都市社会学大会シンポジウム、「歩く・見る・聞く・撮る・魅せる 都市の映像社会学——映像フィールドワークと都市社会学」に基づく特集。
- 6) 映像を活用した社会学教育には、山中 (1993) に代表されるような映画といった既存の映像を通して教育に加え、映像を学生に作成させることを通しての教育も考えられるだろう。慶應義塾大学文学部では、映像社会学 (岡原正幸と後藤一樹が担当) という授業が開講されており、この授業で学生は社会学的な映像作品の作成を課せられている。
- 7) 視覚社会学に関する主要なジャーナルとして挙げられるのは *Visual Studies* だが、2021 年 3 月現在映像作品は査読の対象とはなっていない。*Visual Studies* は、視覚社会学を扱う学会として 1981 年設立された学会、the International Visual Sociology Association (IVSA) の学会誌である。*Visual Studies* は当初、*International Journal of Visual Sociology* というタイトルで創刊され、全 5 号が発行された (Chaplin 2002: 22; Henny 1986)。この全 5 号を編集したのは、レオナルド・ヘニーである。ヘニーは the International Visual Sociology Association 発足当時、アメリカの視覚社会学の中心人物であった (Chaplin 2002)。
- 8) *Journal of Video Ethnography* のほかに、*Sensate: A Journal for Experiments in Critical Media Practice* も映像作品も査読対象とするジャーナルとして挙げられる。このジャーナルはハーバード大学のプログラム、*Critical Media Practice* を拠点とするもので、2012 年に第 1 号が公開されている。詳しくは、ジャーナルのレビューである Köhn (2013) を参照されたい。
- 9) <http://www.videoethno.com/index.html> [2021 年 3 月 31 日最終閲覧]

10) Shrum and Scott (2015) はタイトルに the Journal of Video Ethnography が含まれていたためヒットしたが、掲載ジャーナルは異なるジャーナル、*Visual Ethnography* である。

【文献】

- Banks, Marcus, 2001, *Visual Methods in Social Research*, London: Sage.
- Bateson, Gregory and Margaret Mead, 1942, *Balinese Character: A Photographic Analysis*, New York: New York Academy of Sciences.
- Banks, Marcus, 2001, *Visual Methods in Social Research*, London: Sage.
- Becker, Howard, 1974, "Photography and Sociology," *Studies in the Anthropology of Visual Communication*, 1(1): 3-26.
- Canals, Roger, 2018, "Studying Multi-Modal Religions: Migration and Mediation in the Cult of Maria Lionza (Venezuela, Barcelona, Internet)," *Visual Anthropology Review*, 34(2): 124-135.
- Chaplin, Elizabeth, 1994, *Sociology and Visual Representation*, Taylor & Francis Group.
- Goffman, Erving, 1976, *Gender Advertisements*, New York: Harper and Row.
- 後藤範章, 2009, 「ビジュアル・メソッドと社会学的想像力「見る」ことと「調べる」ことと「物語る」こと」『社会学評論』60(1): 40-56.
- 後藤範章, 2011, 「映像フィールドワークと都市社会学」『日本都市社会学会年報』29: 13-24.
- Harper, Douglas, 1998, An argument for visual sociology, Jon Prosser ed., *Image-Based Research: A Source for Qualitative Researchers*. London and New York: Routledge Falmer Press, 24-41.
- Harper, Douglas, 2012, *Visual sociology*, London; New York: Routledge.
- 長谷正人「占領下の時代劇としての『羅生門』——「映像の社会学」の可能性をめぐって」長谷正人・中村秀之編, 2003, 『映画の政治学』青弓社.
- 長谷正人編, 2016, 『映像文化の社会学』有斐閣.
- Henny, Leonard M., 1986, 'Trend Report: Theory and Practice of Visual Sociology', *Current Sociology*, 34(3): 1-76
- Hughes, Jason, ed., 2012, *SAGE Visual Methods*, London: SAGE.
- 石田佐恵子, 2009, 「ムービング・イメージと社会 映像社会学の新たな研究課題をめぐって」『社会学評論』60(1): 7-24.
- 伊藤俊治・港千尋編, 1999, 『映像人類学の冒険』せりか書房.
- Krase, Jerome, 2018, "The Multitude of Approaches to Urban Ethnography: Blessing or Curse?." *The Palgrave Handbook of Urban Ethnography*, Cham: Palgrave Macmillan, 71-91.
- Köhn, Steffen, 2013, 'Sensate, A journal of Experiments in Critical Media Practice', *Anthrovision*, <http://journals.openedition.org/anthrovision/514>, [2021年3月31日最終閲覧].
- Literat, Ioana, Anna Conover, Elizabeth Herbert-Wasson, Karen Kirsch Page, Joseph Riina Ferrie, Rachael Stephens, Sawaros Thanapornsanguth and Lalitha Vasudevan, 2017, "Toward multimodal inquiry: Opportunities, challenges and implications of multimodality for research and scholarship," *Higher Education Research & Development*, 37(3): 565-578.
- Margolis, Eric, and Luc Pauwels, eds. *The SAGE handbook of visual research methods*. Los Angeles: Sage.
- 松尾浩一郎・根元雅也・小倉康嗣編, 2018, 『原爆をまなざすひとびと』新曜社.
- Mead, Margaret, [1975] 2003, "Visual Anthropology in a Discipline of Words," Paul Hockings ed., *Principals of Visual Anthropology*, Berlin; New York: Walter de Gruyter, 3-10.
- 宮坂敬造, 2020, 「感覚人類学の新たな展開——多元感覚人類学への道筋拡大と情報社会の進展へ応用可能性」『東京通信大学紀要』2: 169-185.
- O'Brien, Vincent, "Visual Sociology," *The Cambridge Handbook of Sociology, Volume 2*, 119-128.
- Pink, Sarah, 2001, *Doing Visual Ethnography: images, media and representation in research*, London: SAGE.
- 戦争社会学研究会編, 2018, 『戦争映画の社会学』みずき書林.
- Shrum, Wesley M., and Gregory Scott, 2015, New Directions in Public Engagement: Ehnografilm and the Journal of Video Ethnography, *Visual Ethnography*, 4(1): 129-136.
- Sismondo, Sergio, 2016, "Editorial: New Venues in STS," *Social Studies of Science*, 46(1):. 3-6.
- Twine, France Winddance, 2016, "Visual Sociology in a Discipline of Words: Racial Literacy, Visual Literacy and

- Qualitative Research Methods,” *Sociology*, 50(5): 967-974.
- Redmon, David, 2014, *Beads, bodies, and trash: Public sex, global labor, and the disposability of Mardi Gras*, Routledge.
- Rose, Gillian, 2001, *Visual Methodologies: An Introduction to the Interpretation of Visual Materials*, London: Sage.
- 山中速人, 1993, 『ビデオで社会学しませんか』有斐閣.
- 好井裕明, 2007, 『ゴジラ・モスラ・原水爆——特撮映画の社会学』せりか書房.

(すずき みかこ 日本学術振興会特別研究員 PD (立教大学))